

△藤森栄一考古学アンソロジー▽

掘る

だけなら

藤森栄一

掘らんでも

いい話

新泉社

目
次

I

掘るだけなら掘らんでもいい話 10

考古学への想い 23

考古学者は何をしてきたか 49

II

原始焼畑陸耕の問題 84

中期縄文文化論 88

中期縄文土器とその文化 104

縄文中期植物栽培の起源 130

諏訪湖の大きかった時と小さかった時 145

弥生文化に於ける摂津加茂の石器群の意義に就いて 158

信濃諏訪地方古墳の地域的研究(抄) 187

諏訪大社 228

III

発掘ジャーナリズム 226

中央道と埋蔵文化財 270

『埋文』は何もいわないが… 273

解題にかえて——書かれた時代と背景 三上徹也 278

- 一、本書はオリジナル論文を底本としたが、一部、再録書を用い、また『藤森栄一全集』（全一五巻、学生社）を参照した。詳細は巻末の初出一覧に記した。
- 一、旧字・旧仮名は新字・新仮名に改め、数字・数詞はある程度統一した。
- 一、難読と思われる語句にふりがなを追加した。
- 一、明らかな誤記や誤植は訂正した。
- 一、写真・図版は一部、新たなものに差し替えあるいは割愛した。
- 一、収録作品の中には現在の人権意識からすると不適切な表現がみられるが、執筆当時の時代背景と作品の歴史的価値を考慮し底本のままとした。

藤森栄一考古学アンソロジー 掘るだけなら掘らんでもいい話

I

掘るだけなら掘らんでもいい話

——若き考古学の友へ——

一

雨の降った後、庭で幼い兄弟が土の上に着くようにして何かしている。日暮れるのも忘れて一心に、鼻汁をすすりながら、あちこち石を上げたり、掘りまわしたりしている。

——御飯ですよ。と母が呼ぶと子供たちは急に思い出したように、土だらけの缶詰の空缶をぶらさげて、勝手口から入ってきた。兄が空缶を握りしめてしまったので、弟はひどく不足らしく、

——兄ちゃんよう、兄ちゃんよう。と後から三尺帯をゆさぶりながらついできた。

——お母ちゃん、大きなミミジュ。これもこれもみんな大きなミミジュ。と兄はとても嬉し

そうだ。缶の中ではお母さんを完全に恐怖させるに充分な、たくましく太いみみず共が、いっぱいからみ合っている。

——おぼかちゃんね、きたないわ、早く捨ててお手を洗っていらっしやい。

——だってお母ちゃん、ミミジュが鳴くっていったじゃないの、だからぼく。と半べそをかきながら、叱られた兄はすぐごとみみずを捨てに庭へ出たが、そつと思いついて、縁の下にみみずの缶を隠した。そして植木鉢をその上に被せて、帰ってきて御飯を食べた。

夜の更けるまで、兄は何遍もそつと縁へ出て、耳を当てて聞いたが、その夜はとうとうみみずは鳴かなかつた。月がいっぱいに照っていて、冷たい夜の気が子供を震えあがらせた。弟は母とぐっすり眠っていた。

次の日、兄はみみずはどうしているだろうと思って、植木鉢の蓋をとってみた。みみずは一向に動かなかった。兄はそのままみみずのことは忘れてしまった。

長いことたつてある日、弟はふと縁の下のみみずの缶を見つけた。

——兄ちゃん、ミミジュだよ。

——ミミジュなんか鳴きやしないよ。といったまま兄は寄ってもこなかった。その時はみみずはもう錆びた釘のようになってかたまっていた。弟がゆすってみると、コロコロ缶の中で音を立てた。弟は裏の小川へ行って、みみずを水に漬けてみた。バラバラになったみみずは、グ

キグキ曲ったまま、下の方へ流れていってしまった。

これはぼくの書いた小説だよといったら、君は何だ馬鹿馬鹿しいというだろうね。ところがだ、ぼくは心の中にもペンの先にも、忿懣ふんまんと痛憤がめらめらと燃えさかっているのを、いま消すことができない。どんなに下手な理論で、いかにつまらない、短い文章でもいい。いまこそこの笑うべき事実を嘲あざわらってやりたいのだ。

君の若い火のような魂で、このぼくの「永いことみみずを掘っていた話」を聞いてくれ給え。

二

いわゆる考古学は、みみずを掘る子供みたいな心理、環境から出発した。人々は太いたくましいみみずが、後から後から出てくることをもって、最上の喜びとした。そしてある人はみみずを蒐集することに異常な興奮を覚え、そのいわゆる趣味に酔った。このことには君も異論はないだろう。

ところが、ときにはそのみみずが骨重的価値を与えられたりしたけれど、やっぱりみみずはみみず、時と共に、感興と共に、人と共に、やがてはあきらまれて川へ流されたり、一生かかっ

たコレクションが、一千元に売れたとか、一万元で資産家にひきとられたとかして、やがては考古学の教室や博物館で、整然たるカードの下に死滅したみみず同然にかえるのであった。

学問がこうした蒐集癖から出発したことは、考古学にとって何としても悲しむべき事実であったが仕方ない。後に科学の観念がこの興味の学問に注入されて、非常な馬力よみかで甦よみがってきたことは君も知っていることだけれど、残念なことに、科学の観念は、みみずを正しき教材にすることを教えず、その掘り方と、別け方と、並べ方を教えただけで、学問のエスプリはお留守みたいで、少しでもその方向へ苦慮する傾向のものは、例の家の芸たる「黙して語らず、眼を開いていても見ようとせず」といった調子で、黙殺されるのだった。こうしていつまでたつても物へ、物へという執着だけが先行する心のない学問が彷徨していった。そして子供のみみずみたいに、無茶苦茶に資料は掘りまくられた。

もちろん資料のない学問はない。しかし資料だけでは学問は成立しない。ぼくだって考古学において資料が大事なことは知っている。だがそのことはしばらく措いて、みみずの悪口、ぼくのワンサイドゲームをいまま少し聞いてもらおう。

学者は、考古学はいわゆるみみずの学問だから、私のみみずは私のみみず、君のみみずは君のみみず、資料はなかなか人に見せられませんが、まだ此奴こやつの太さは発表してくれるななどといわれたりする。おれのみみずを無断で使ったというわけで詫び状をとったり、とられたりし

た大人のあったことも君は知っているだろう。学者のやっていることはみなたいへんなことにちがいない。掘ったり、集めたり、分類したり、総合したり、仮に対象が何であっても、本能としては、一応敬意を表さなければならぬことだ。

こうしていまやわれわれの考古学は、無意識のうちに「完成」と行きづまりの一步手前まできた。ちょうどそれはみみずの動物学的位置については、至れる限りの分析と総合が完成したときと同様であった。ところがさて、みみずは喰うこともできず、肥料にもならず、せいぜい魚釣の餌にしかならなかった。どうせこんなだったら嗚呼どうして始めから、何のためにみみずを掘るかを考えておかなかったろうか。たったこれっぽちのことだったら、みみずは土の中へまだ寝かせておいてさしつかえなかった。掘ることは何が出るかが問題ではない。何のために掘るかがじつに終局の問題なのだ。みみずにしてもそれを餌にして何を釣るかが、釣人にとってはもつとも大きな関心なはずだ。

大人気のないみみずの話は止めるとして、確かにわれわれの学問はまったくの無為に沈溺しつつあることを君たちはわかるか。現に君たちが進むべき道も知れずに、焦燥していることがそれだ。君、いまわれわれの生きている位置はどうだと思ふか。あらゆる不要なもの、じつは人間個人にとつても、日本民族にとつてもそれこそ必要な、真理であり、学問であり、生活であるすべてのものが廃され、力のみが伸びていくときだ。

考古学はどうしている。学者は何をしている。嗚呼。

書こう、断固として書こう。悪いところを切り捨てるために、気づいただけでもが大だんびらを振りあげて手術をはじめるべきだ。今こそ負うた子に教えられるがいい。

それもどうだ、考古学が断首されるか、甦生するか、その大だんびらをじつに第一に振りあげたのは、悲しいことに考古学者ではなくて、何といまわしい法の網だった。

われわれの学問の世界には、かくも満ち充ちた知識とすぐれた知性の裡にあつてなお、先輩からの宿命的遺伝である蒐集癖を捨てることができなかった。日本の人類学・考古学の上には不滅の業績を残したK博士には、ついにみみずはみみずで、所詮、古骨よりは古き美の残骸へのノスタルジアの方が怪しく幻惑した。こうして莫大なみみずも、われわれの学の誇りも、博士自身の栄誉も、K大医学部主任教授・正四位・勲三等・医学博士という、おそろしいほどいかつい肩書きも、みんな一把ひとからげにして川へ流してやってしまった。永い博士の開拓期の苦闘は、子供が隣りの庭の美しいチューリップの花を無断で腕一ぱいに摘んで帰るような、みみずの幻夢で空しく幕を閉じて終つたのだ。

だがきつと学界は事実をK博士のプライベートな誤りとして、できることなら知らぬ顔の半兵衛がしたいであろう。ところがじつに君、それはそんなに偶発的な出来事と違ふのだ。学界の屋台骨に火がついたのだ。博士の行為が罪だとしたら、それは人の罪ではなくて、学問の行

き止りにできた一つの腫物だ。人の罪に驚きあわてている愚かさよ、病源は学問自身にあるのだ。今のスランプに平然と処しうる学問のマンネリズムをかえりみるがいい。

何のためにそれを掘るか、何のためにそれを学ぶか、いかにしてこれを学ぶか。そうした本義的なエスプリを教えられなかった。また苦悩しなかったわれわれの学問は、本質的な感激を喪失しつつ、材料と知識はガラガラと積み重ねられて、片寄った誤れる知性は一抹の芳香をも持つことなく低徊し、落莫し、今や崩壊の戸口に達しようとしたのだ。どこへ行く考古学、新しい再建を余儀なくされているのに、学者は平然と現状維持の夢を見ている。K博士のもとに生み出された腫物は、それが学界の生命にかかわらぬ以上、触れられないのにこしたことはないというのだろうか。

三

秋風蕭条五丈原頭

戦利非らず 馬謖自縛して帰る

陣中冗言なし

涙を揮って 馬謖を斬る

H博士はただ一言、「親友であろうとも、大学の処置は明らかであり、簡単です」と断ぜられた。大学としてはともあれ、願わくば学問としての全面的の失墜を、この永き学問の根底よりの昏迷をこそ、断固として斬ってほしいのだ。物が備って心が無い考古学に、精神を注ぐきっかけになることを願わずにはいられない。

あの明治期の古い考古学からの脱皮の時期からの、いわば同志であり知友であったK博士を、かくも無残に切らなければならなかったH博士の苦しい心境を思う。そしてこの類なき学問の悲劇に驚き、歎き、そしてわれわれは、君たちは、いまなにをなすべきかを考えなければいけない。

民衆にこびたか、世の利の人であったか、どれほど象牙の塔に不適であったか、ぼくにはわからない。だが山本一清博士の京都帝国大学追出し事件のときに、あの人のとった英文学を背景としたたくましい自信はどうだ。それなのにこつちの場合はどうだったか。K博士は専門の病理学で失敗されたのではない。一十体か一万人かの古骨と、莫大な考古学的資料が集まって、さて学問の心の中空を感じたとき、考古学に対する自信と若々しい情熱を失われた時、そっと博士の中へ忍びこんだあのみみずの幻惑のいたずらが、このいまわしい事件に発展したのだった。けれども現実には単純に盗まれたといい、贓品だといいい、盗みだと断定してしまっている。

いまや歎いてばかりいるときではない。さらに本質的にこの危機を分析すべきときだ。君も